

54 勤王僧 月照 生誕の地

中央区平野町2丁目6(三菱ウエルファーマ)

- ▶ 昭和初期まで、この地に佛光寺 別院がありました。
この佛光寺 別院は、勤王僧 月照の生誕の地で、文化10年(1813)に生まれました。
15歳の時、父に連れられて京都清水寺成就院に入室します。天保6年(1835)には住職となり、安政元年(1853)2月、寺務を弟 信海に譲り、以後、尊王攘夷運動に身を投じます。
水戸藩 鶴飼吉左衛門、梅田雲浜らの志士と結んで、密勅降下の画策に努めました。
安政の大獄が始まり、月照も幕府より厳しい追及を受け、同じく追われていた薩摩藩 西郷吉之助とともに京を離れ、鹿児島に逃れます。しかし、薩摩藩は、月照の入国を許さず追放します。これまでと感じた月照は覚悟を決め、日向へ向かう船の上で辞世の句を詠みます。

『曇りなき心の月と薩摩瀉(さつまた) 沖の波間にやがて入りぬる』

『大君のためには何かをしからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも』

その後、西郷と月照は、抱き合うようにして錦江湾へ入水自殺を図ります。
すぐに救助されますが、月照は絶命。西郷は、奇跡的に一命を取り止めます。



勤王僧月照



錦江湾

55 北組惣会所跡

中央区平野町3丁目4

- ▶ 近年まで石碑があったそうですが、今はなくなってしまいました。江戸時代の大坂は、大川以北を「天満組」、大川以南より本町通りまでを「北組」、本町通り以南を「南組」と区分けしていました。これらが大坂三郷といい、各組には惣年寄という理事がいました。その惣年寄などが集まったり事務を行ったりする場所を惣会所といいました。惣会所の下に町会所があり、人別帳や土地台帳を作っていました。

56 新選組ゆかりの地 加賀屋四郎兵衛邸跡

中央区道修町3-4

- ▶ No.47で紹介いたしました、加賀屋四郎兵衛の邸跡です。
元治元年(1864)11月15日、新選組局長近藤 勇の名で加賀屋四郎兵衛(輸入品の唐糸反物を扱う豪商)を呼び出します。この地で舶来雑貨を商っていた分家の加賀屋徳兵衛が指定された三橋楼に出向きます。近藤より大坂商人に対し金15万両もの献金要請を受けます。このあと、問屋筋がたびたび会合を行いました。集まった金額は22万5千50両になったそうです。



加賀屋四郎兵衛邸跡

57 少名彦神社

中央区道修町2-1

- ▶ 道修町で開業した名医 北山寿安は、父である栄宇が中国より持ち帰った中国薬種の神様「守農像」を大切に祀っていました。寿安の死後、道修町の人々がこの神を祀ろうとし、日本の薬の神様 少名彦神分霊を京の五条天神からいただき、ここに安置したのがこの神社の始まりです。
- 文政5年(1822)、コレラが大流行し、コレラの当て字に「虎列刺」を用いたことから「虎頭殺鬼黄丸」という丸薬を考案したところ大当たりしました。
- 以後、その宣伝に「張子の虎」を作って魔除けになると言い触らしたので、現在でも11月22日・23日の神農祭で「張子の虎」を求める人でにぎわいます。



58 谷崎潤一郎「春琴抄」碑(少名彦神社) 中央区道修町2-1

- ▶ 少名彦神社境内には「春琴抄の碑」があります。ここは、谷崎潤一郎の有名な小説「春琴抄」ゆかりの地です。小説の冒頭に「春琴、本当の名は鴉屋琴、大阪道修町の薬種商の生まれで歿年は明治19年10月14日(以下省略)」とあります。



59 新選組ゆかりの地 山南敬助ゆかりの岩城升屋跡

中央区高麗橋1-6

- ▶ 高麗橋近くにあった岩城升屋は呉服商として繁栄していました。大塩平八郎の乱の際、焼き打ちに遭いましたが、早期に復興を果たしています。東京都町田市にある小島資料館に保存されている「異聞録」に「新選組局長助山南敬助、岩木升屋江乱入ノ浪士ヲ討取、打折候刀、此時会津公より御賞美として金八両拝領いたし候」とあります。
- 山南敬助は岩城升屋に入った押し借りの賊を倒す際に刀を折り、その後、賊を倒した褒美として金八両を京都守護職 松平容保からもらったようです。
- 類似した事件が鴻池屋でもおこっています。



岩城升屋跡

平野屋五兵衛邸跡

中央区今橋1-5

- ▶ 両替商の中でも代表的な店であった平野屋は代々、五兵衛と名乗っていましたので「平五」と略称されていました。道を隔てた真向かいに、同じく代表的な両替商の天王寺屋があり、こちらも代々、五兵衛と名乗っており、「天五」と略称されていました。五兵衛が2軒あることからこの辺りを「十兵衛横町」と呼ばれていたようです。



平野屋五兵衛邸



第九代目の平野屋五兵衛は、新選組(当時はまだ「壬生浪士組」と名乗っていた)から再三借金を申し込まれていました。数回にわたり主人の不在を理由に断っていましたが、文久3年(1863)4月2日、芹沢 鴨、近藤 勇、新見 錦、土方歳三、永倉新八、沖田総司、野口健司は、主人の帰りをここで待つと居座ります。店の者が密かに奉行所へ訴えましたが、程よく帰されてしまい、ついには100両を貸し与えています。



近藤 勇

<新選組の隊服>

永倉新八著の「新選組顛末記」によると、鴻池屋で借用した200両で京都の大丸呉服商で隊服を新調したとあります。鴻池屋から借りたのは文久3年7月頃とされています。ところが、同年4月21日に会津藩士 広沢富次郎は將軍警護のため下坂していた新選組を見かけて「鞆掌録」に次のような文面を書き残しています。
「浪士、時ニ一様ノ外套ヲ製シ(以下省略)」
この「外套」が新選組のダンダラ羽織を指すとすれば、鴻池屋で金を借りる前に、すでに隊服ができていたということになります。したがって、鴻池屋ではなく平野屋で借用した100両で新調したということが有力視されています。しかしながら「外套」といっても、ダンダラ羽織を指さないケースが考えられます。隊として組織されたので、とりあえず全員一様の単なる羽織を新調し、鴻池屋からさらに200両の金が入ったので、派手なダンダラ羽織を新調した。と考えると永倉新八の書いていることは間違いではないといえます。



新選組の隊服

61 大阪会議開催地跡(花外楼)

中央区北浜2

▶ 10階建てのビルになっている「花外楼」という料亭の入り口前に「大阪会議開催地跡」という石碑と説明板が掲げられています。初代伊助が10代のとき、天保年間に北浜で「加賀伊」という料理旅館を開業しました。

元治元年(1864)の夏、京都から追われてきた長州藩士を匿ったのがきっかけで、伊助は時代の流れに目を向けるようになり、勤王思想を持つようになりました。以後、この「加賀伊」は志士の集合場所となりました。

桂 小五郎探索のため、新選組が飛び込んできたこともあり、必死に匿ったこともあったそうです。

明治6年の政変で西郷隆盛、江藤新平、板垣退助、後藤象二郎ら維新の貢献者が政府を去り、更に政府に残った木戸孝允も

征韓に反対した政府の「征台」実施の矛盾を指摘し、下野しました。孤立無援になった大久保利通は、政府存続の危機を感じ、また鹿児島の不平等土族に対抗するにも、一人の力ではどうしようもなく、困り果てて

下野した木戸孝允、板垣退助を政府へ呼び戻すため、大久保が大阪に乗り込み、井上 馨、五代友厚などの助力を得て、明治8年(1875)1月8日「三橋楼」で木戸と対談します。

後に板垣が来阪。「加賀伊」で数日間かけて話し合いが行われました。

これが大阪会議です。2月11日、和解が成立し、次の4点が確認されました。

- ①国会開設のため、まず元老院を設置
- ②大審院を作り、司法の独立をはかる
- ③地方官会議を開き、民情を知る
- ④内閣と各省は分離



大久保利通

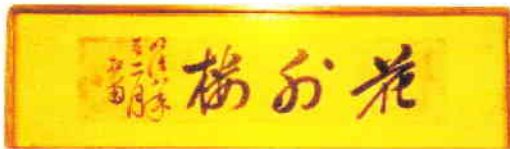


板垣退助



木戸孝允

この大阪会議の成功を記念し、木戸孝允自らが筆を取り、「花外楼」という書を残しました。後に店の称号を「加賀伊」から「花外楼」と変更しました。



木戸の主張する「三権分立」と、板垣の主張する「国会開設」の推進が約束されたので、両名は参議に復帰しました。しかし、その半年後、板垣は辞職。再び混迷化し、ついに明治10年の西南の役を迎えることとなります。

62 大阪金相場会所跡

中央区北浜2

▶ 江戸時代の貨幣は、金、銀、銅が用いられましたが、それぞれの交換比率を定めるところが金相場会所の仕事でした。

関東では金を、関西では銀を用いていたので、江戸は銀相場会所、大坂は金相場会所といいました。

慶応4年(1868)5月、銀目取引停止令が出されて会所は閉所されます。